洛津流行寫記　八

ヘ 13
3299
8

茶磯堂

湯津流軍精記巻之八

要害陣落城之事

并 佐井幕方出陣示之事

扨種々高白大臣江東屋高人しめしさく
せんての軍勢をもつて城をおしよせ
ちかくの鉄炮をうちかけときの声をあげてせ
く鋭兵つゞきてせめかゝるいきほひと

大正十一年八月廿九日 本大學出版部寄贈

ヘ13 3299 8

とかくしけるを城中にも加藤聞きに
まし候かしこまりてとりに籌
かるまじくとて閣老どものともなく
せんかたなくして御ものまてにもに
しく時をうつしけるを早申し
言ふかたもなきまゝにも城中とも
ぞありけるかゝ城兵ちんをと
みくく和兵おもふ茲の門をひらき

みな加藤が衆くうら士
卒をわけ其勢子熊の
ことく千里にかけりけれは三千
余騎日本勢の城をとりかこみて軍
といふものをしかけるに
しき事おもひつきなんとてせ
取りのゝく溝洫にそふて陣
久願か伏し見かへりて来

寄勢の兵来りかハうちやりてせめけれと
とかくしけるうちに千早城の兵とも
是を物ともせす宿所ハよく知りけり
日ハくれかたになりて宇治遠よりよせくれハ
うち帰りけるに桐谷の細道をとりて
加勢周辺をはしり日和ハ待得く
かくる寄手大きにさわきあつまる所
とかくしてかうかへしとしてけり

くらしけるまて八幡山より赤坂と
ふくへの張良一手の兵を引て城へ
おしよせ引く由追ひらくせんと
寄勢の兵と一手にうちつれのりやもと
なりしハかかる日和勢ハのこらすうち
しけるまてにひかる遠き道て
小嶋かしけて赤坂へ向かふ小勢をひ
兵ともかしこくしてくるとかやゆや

らん大権現にきしんまゐらすべしとて
近身ハ摂州納武蔵守が地利をかんがへ
後陣の兵三万余騎を二手にわけて城にかゝる
さしそへ相図の時分にかゝり出むかへ下知す
とかくし御とさる事十町ばかりまへより
大将は三百余騎にて半をさしてかゝり心中に味方
はやこのところまで近寄てかゝる織り傍を立かゝるを
しおさしてハかゝりつゝ一度にかゝる

せし小勢をとりかこみてはげしくせめけるに
一同にかゝつて敵兵の中へ乱入り
まつさきにすゝんで出入りしてんさう
の郎等めいめいに突き立て、塩縁
ハ方々の軍勢を追かけて、とらへずして
あつかけ来りて、年久しく日本の旗を
たかく立てゝ、せめ寄る綺羅をたてゝ
事のほかに勇みて猛き旗を

より二十日迄ゝくゝ攫御しそらに蔵舟
楼さくかゝしさいふりりて切くまきんとゝり
ちらえきうけく流の兵とも大ゝにつゝふ
きうもとり中くして如にゝ軍ゝ
ゆへきしとりゝへもきゝへとゝして
こゝれさきことふかく在て不城へ入んと
まへ文より陳文碩ゝりしゝも和兵の
いつゝうち後もとふんて色ゝ縁さび

城中きゝ心よりもひとつも落るまでに城の後
ゐるより鉄炮の音きこえしく笑へ鬨
ひさいふいかゝしとうしろをそむろに数
孔明天をあふぎかゝしをいゝ兵のあかゝり
日和の楼前ゝ落しえて知ゝひて
しく討りめさし数言の軍楼城へよせむ
のていゐ軍しかゝは陳文碩大ゝゝ奴とゝろ
き和兵いかゝしゝうしろふまゝ

ましや此大軍(このたいぐん)一同にかゝらんとさハぎ
軍中ハかねてよりおもひまうけし遠道(えんだう)を
つよき千余(せんよ)にわけ置それ〴〵の
ともがらをかしこきところにふせけるが
大将かくのごとく勢ちに下(くだ)くの兵(へい)と
我(われ)もとらけいぶしく山路難所(なんじよ)のき
らひなく見(み)えしが勢をおこせ
名字を吉備(よしき)大将渡辺右衛門(うゑもん)八十ふんさ

敵(てき)とおもひつゝ陳文碩(ちんぶんせき)がむかふる道(みち)を
しりてつかしく士卒(しそつ)拾人斗拾人ばかり鉄(てつ)
砲(はう)をとりもたせ此道(このみち)にかくし埋伏(まいふく)させけり
陳文碩(ちんぶんせき)ハかくとハしらでいさみて無勢(ぶせい)なる所(ところ)へ
者どもてつはう鉄砲(てつはう)をうちかけしかバ陳文碩(ちんぶんせき)
いきほひこめのこと(この)のとりいくさとうし
かひなくかけちらされ此度へ国城(こうかんぜい)
の方(かた)へ退(のき)ぐ中にうちまかせ(ん)に

天兵おんとしてかく霊現忽然と来り
かゝりしかは吉崎信田さまへとうくく
長郎ひきつれて寄ハにくらそ王勢を
けふめ敵の手にかけしほ取り
立かへり城中のきへ人々ふ張らんと
もしせん千里ちうから加勢の兵り給も
さんくにまちもしのもかへて城中へ
へらんとあるを内よりも洪紀をうけ加勢

吉崎大夫信田か城のうちにてゆらく迄
出すまてに張陣勢大きにおとろき給ひ
そかげかへらんとせしかともこらふかまゝ
い遂をとらしかいうちくまる所なく
うしろより大軍攻寄ふ押ハ先を
しかちよそものかちはなとおのれ
ちからかへしうら死出るもゆり
ふもと法るひとつにかけりてふく

ゆるして人命をたすけ降参をうけいれて
道に引まいらせくだり給ふとぞしけるが
も無念におもひける武蔵守下知していろ
降参の輩をみな〱殺害せさせこと
ごとく打ころしけるほどに其のこ
こそみし検見しておもひに軽く
城中へ入り軍役をとくとせし人家へ
と渡しける大将家人は今般しり

其前はいまだ陸にあがらずにて
先手の合戦を見合せもせずして
武蔵守一氏がはからひにて籠城の
兵を悉くころしけるより要害の城
を入りて讒言のことをしきりと相談しける
しけるに兵粮をはかりて忽ち軍勢
ばかり体をもしかれば名主の
城をせめにしてはかりしと

其後兆帝力政勝ハこゝにむかひけれハ東國
といはれ時先陣とのぞミしかども
兵令さうじまへしとくゆるさず
ぜひなく出陣をとゞめて後陣に
ひかへ東國の人々ハ勢ひつよく
られけれどもかつしく先手をのぞみけるや
高山右近のうへは先陣にむかへ
とし物事もなりて此日ハ千里にかけ

城せめたて是が果しと先陣く命せらるへ
しけれハ加へてゆるしけれバ程なく落城
是を聞て其後帝力政勝の不届傍若
無人とて怒り給ひて出陣のたびに軍
陣をとゞめて其由を申さしめ
兵令をそむきし先陣を願ふ我
今更いかなる他人にゆづりなむ
らんや早々当國を先陣せよとの

ともいまいふ三軍をせむりかる
に陣を御座して出て里我何の
面目ありて後陣をうけきやうぞ
きて千里山ハ要害堅固にして敵兵
もまたおそれかなしむとて笑ひかり
反掌の勝利まてこそ西の武皇の手柄
となりハ寺けゆへに此後先陣も
先陣をくつくらまん事をかへさと

いへどもそれをさゝへてふせぐ出でされ
いまんやゆ陣を御くん事とあれ
兵きて名きい我く陣をはりて
敵をゆるす事ありてまたとなく軍
かはさふ義にかくるに陣をかう
しかして帝力のまことにそれぞれ
数年とうけのまるもの我ら陣を
連のせん陣をとうじふかにくるん

らハ此国征伐の綸旨をかうむり
某ゑん殊とゆ吏ぬる所新田殿の若党
そしくかくのつことくさしめのふさる間
わけて又御家をかしこまりてかりて平氏
大将より一氏へ軍事をとまかせらるゝと
し事也へ程と御心を其品と見し
しかしく道津も有しかども為関
ならうちてハ御心もあらゆるの御そく

かまへハさいそ上へ返事いたしけるかば
ゆきちり西塔増ハ合意なりけるの城せめ
しかしてハ御人もくせんかさふきせまし
いはきもも某しかしゑそてこうけし
さうてしそ気多をかくゆるし江ふ
三ヶ条つ見くと此くく程ヶ島ハかまつて
帝日ともかへかつゆるハ取さえとしてた
の人城ハ程ヶ島ともかくもとおりいのふう

其も扣備へと申もしそのふ先陣
二陣とさし先手ニハ何の為めとて前後
ひかへや戦場へのぞんで先手打まけ
なれバ助陣よりかゝり入替陣中ニ而助る
三陣へ令もかゝるべく戦ふの軍中の例
法なりむざや大将後備先陣備て此法
二陣三陣とかゝるべきおふは(?)いたすと九(?)
ゆるふ所なかく京都くの和白ハ古(?)まふ

得ぬ事の中に小路(?)へ又出陣の印を
整(?)絡(?)へとのゝ旦(?)べし然ば是を旗(?)
流(?)源(?)團と頒の後に本絡(?)へしとの令
もなきにハなつる事さい是なる故として
中なる梶原太(?)景(?)時(?)ハ源氏の節(?)を
遣(?)士の承りは将(?)に仙(?)(?)
ゆふて先陣ハ雖しも如(?)是(?)和(?)り
高(?)なるに一気(?)んさし出まし(?)を今(?)さう

後園としけりはおもひわたりの結構たる
のよふく出なるまゝし東國し古半ハめく
しめかくんしの婦集ハかけまじきしん
の城善おりけもかしせしるみぎりも
此處も一方なんせん深くハしんしの本く
吉あふハ御方の前ハせんいし遠くぬるく
さしじめの多うとお相ましむいひ
まへも太守のしらめ佛音の情利とかはり

おそくハ御そのふかてら手柄とたつ
そうけ串御んや此處の武家の志人衆
の知る所なる大善深をとせまじともしも継
儀しのふてふくまつや根く此處まうり
御合せるもの手備かりとおや御しんハ
安知中くハかとしも大いのかつら武蔵も
一氏く意をふくそせいしせん全
とのぞくみもまつく武蔵守ともとさう

しくゆりり、上月の不知なれどこゝろ
かし京きんちよの中さりしを於ゆえるのも
取ろう四国岩のうへハ無軍を用ゆ
金しものさじはめ成まてといかぐも
明日の城せめハ上月をたんとしかへゆきさん
是より千里山いまぐくハ何程五拾里之
千里山の左右ハ乱蛇浦虎竹城と二不
助り番寒空国の不わりてゆしたや

きくせめかくし去かまことし上月
しいそ不知まりてら乱蛇浦の方へ
ちんぢん様子高江知をむかふしめん虎竹
城しれのさま強れをとりつく攻入を
まへし去かまとども千里山をせめとる
さまてら左右の乱蛇浦虎竹城ふかく
まもりし是かくハ明日ふ秋月左
松尾年人維其上月付ぬるとりは門て千

霊山のせめ人くもかゝりしめんきかる
時にハ朝敵の所望も達し先陣ましく
中ほるかもおしゆたさまあかく縁所
おきく所かもらこ宇山ときや争論をおめ
関東のためと相りよりかくしと異儀
あきゆるし天下をおしろるゆへ縁所
ありなも同し朝敵とはまこと我を
人に先陣せんとものそうかゝらく落居

くたろこの山三人一所くもちろへ参らう
きかけもちしかうて家人並相模の中者と
ありまつくいちくこうかつて一ゑの功を出
まてハ征伐合戦の事とかゝる弟にまれ
ごくおさめる事なりきと中御まつ
こ夜もこう田畑く仙居さうう
其後朝敵相馬小次郎将門東国に千里を押
平将軍とおし清御事

扨も千里山の城には孟龍喜といふもの
大将として五千余騎にてかため居たり
が軍令は朱易秀左にてあるその智謀深く
軍学にくはしくしかるにその以前無く
王城より和軍の陣ゆへん事をしらしめ
し用心すべきのむね下知有ければ
とく大将孟龍喜もとより其備へ
をかたくして所をまもりて日夜勢を配ふ

云く渡海して要害をかためよし
注進しけるほどに大将孟龍喜是を聞
ずつと諸将をめしあつめいろいろと
朱信頼といへるものすゝみ出申けるは
あまた和軍かくのごとくかさねせめて
大軍なるべししかるにきたるべき
ゆゑしるくひかる軍かならずひかへて
来たらばこれ所をとりてまづ用意と

きしうへをやぶりて無象宗の旧我にて
くわんぎん陳文碩いかなるとうくいか
ならぬ風ひあらそん事とも知るよ力なし
權勢にいらく内縁の威くはのまま威
ほしいまま法羅を加へかさしいかれ
朱衛殺りらくことでもかしらくる
しかくれいさこかの兵を加勢として
はりいますくおよふん亦せん兵ゆ後ゆ

はくまて陳元碩城とんさんかてまもり
義をなうれひつせう知らは羽も好
意にしてむかしと屋やくまかし
いさ軍をあつめかへ門にたいふまろ
おひよくしとまんるゆへ無量宗天皇に
忠臣は城兵二千余騎に百姓とまいて
道すがらいづしかろれて朱衛殺が中
せしこともく陳文碩もろくの旅り

かゝる存もよらぬ西教皇の道とて
せく明かくして千里山をかけ来り
しかるに魚住院もかひなく出て素門
とかく城中に待ちへ参りぬきんて
まそかりはまても陳ヶ原に御申けり
よく縁さひ居るかく孟家七ヶ村
両しれをかしくいよく私への意ま
ぐり加縁を作紙をまいらせ果し

直にこそせちりんとおもひしかと当
城を明けおかんまゝかりしとかくおん
手下の兵をはらはせし所に和睦大事
かくかなひかたききにたおそはか
んともよもかたき来てもまつものか
不せん要害随八敵とおもひてまさ
あかしく無益の所とさらへ居て生
そはくとおもひくらし分かんま前

城ふく一吾を一所とかへし合戦いたさん
小船此やうにきかねらんと思ひ軍に如何
てしとまるしうやましいくさハ陳文頴
前面しもく紅軍の中へ切てとるの如く
是和吾大軍といへとも栄門を知ら
あるもしまへてく寄勝用中ゆかし
中ゆかかいかくし以定を中に
らし此所くわしせ用ら甚しよの

孫よてふ合戦ながらしきみて敵く
加勢をたて加へてまのらのおすし
とりまて朱将説加へてさゆ後て
先生大王大帰人を立てし高人面
國へ還面せしそのじもさそ和軍の
栄門高みあし傾城傾國のいまし
先今ありいゆくのてん相公れ
住まらもはちまくれくみもとおん

しかいしもしやとしらるゝ身上八
陳善積いかゝ赤面して両目をし
しかひさしく玄冬を於し閉口し
かゝる朱傳統をとくしける松目を踏
於安屋縣の百職をなげく従軍との
所にて体を見しかるに千里にすぎて人
為捨置六丁一ありといふ夜明く廿三なりと
縁沼あるひは文日の中まて合戦なり

かくかゝるちよりおもしろきこし
くらなりとも舟浮げく無根とはつ
ひ家の二天くむ也は軍師武藏二氏
先孫のともかくしもひくのく
やさいとく一部の卯をとなさんとく
こころもふかいくもとえへらん一生ふ
力を無げれひ卯を二用ふさゝげて
かへとやりきつゝおのゝ取組して

志らきゝ真弓こそすきまもなし
かゝる佐野雪月松音との三花いさゝ
まことにゑんとも知らしいはしく千里山をこゝ
ろざしければはるゝともいはゞ紀のかゝる
わたらはる拾里を三時に許す年
の利に千里山のふもとゝいふ
ふもとをとりもてる御まことに要害堅固に
城代して田ゝおもてをせめる

くかくくぞくしつゝ寄手の三花
先鋒の虚実をうかゝいしく軍勢
案勢同意して囲をとり仕とゝめけし
かゝるところ山崎の城中より幾千万を
いふ事をまもりし中にこそ
三用意をさせしかゝりこも詞
せまるありとしたゝめる松浦松尾
年人がいよく両城ていさつて堅固

よりして諸戯(がくげい)の用意(ようい)ゆりしからん人(ひと)也

またざまざまにかゝるかしこき名(な)

人馬(えむ)の道(ゆし)をとゆるあらせその知らぶ(くふう)

をしらるべきでとゆけれは仙台(きい)五十騎(そてうき)

をとりうらひていりてさはまな

ゆるしをひまた今(い)管(まんくわん)ふかなり

ふなき(みち)いそくまじいりんや一戦(せん)

おもはしで何(なん)ぞ義(き)の戦(ぐわう)とし

らん其(それ)がしせんのぼり其器量実(そのきりやうじつ)なる

かくひそかにしても手勢(てぜい)を率(そつ)してて

せいどうきんとせるを松尾年人(まつをとしひと)おし

とゞめていはく軍師(ぐんし)の命(めい)はおもきの

事(こと)なり人とへしてもかひなきん

事(こと)ふしゝかるゆへして制(せい)し置き

五十騎(ごてうきせい)を率(そつ)して行(かう)付所(ところまで)まで

来(き)たれとせめゐたりぜんは国(いこく)の

敵をあざむくがごとし。まことに張良が
とも諸葛の劉備をたすくるも孔明
なんかふれば関の忠も張飛にして
ところに是が采しかし縁のと
いはれてもやをせいぶじせう。将苑
兵人秘月奇もやもやらなん
事をおもひてつゝしみぜいなく
ないしぶんは城中くはしく

の兵月をえて抜てそこに朱傳に下
知をおほし鉄炮ならぬ太石大木をおろ
くおもつ敵へ流せ帯中国よ幸持なり
しくふかせめなほり関をとろし
て鉄炮をうちかけおきさけん
とかつらししかるに朱傳能ある鉄
炮を折りをふて兵気のうへより大石
とおかけいぶし大木をおとしかくる

半はめ何かきのごとく久しくつぶ母うり
ハ沈脆ハまとしゆきとまふちたかかとを
しかくえてこし寄手の兵ハ多ちまた
ち三隊入半うち多とさまてく死し
たまハ後手寄手力大まふいろく士卒
をとう手せしく三郷くせめ戦くば
らんとまてども治戦寄ふしきびし
く雨をとひくべて手ゆう知れまで後陣

寄手城と白服でめしてハかき深く
ふかめ兵らしくと後陣く流きかし
秋月松尾しきつまふハさかめるやく
寄手せんうちふく一念あるうち離く
王をみえきたり

陳文碩（ちんぶんせき）

[illegible]軍[illegible]巻之八終